

トマトリップ

ラインナルト ▼

ヒューストン伯爵家の長男。  
一見、天使のようだが……？

ジェネミー ▲

アルメリアの弟。  
なにかとリツキに絡んでくる。

アルメリア ▲

ディラン伯爵家の娘。  
勝気な美少女。

▲ローディ

庭師の青年。  
とにかく純朴。

宮川莉月 ▼

慣れない異世界でメイド業と  
トマト栽培に勤しむ20歳。  
明るくて前向き、そして鈍感。

アデレイ ▲

リツキがトマト畑で出会った超イケ  
メン。ラインナルトの友人らしいが、  
イマイチ素性が知れない。

登場人物  
紹介



## 目次

トマトリップ 7

薔薇の感謝祭 285

トマトリップ

心地よい風が吹いている。

空は快晴で雲一つなく、日差しは眩しく、鳥たちはさえずり、緑の木々は風に吹かれて揺れている。私は深呼吸を一つして、伸びをする。

「んー！ 今日もいい天気だー！」

こないいい天気だったら、私の植えた苗もぐんぐん伸びるに違いない。

私は、自分のテリトリーである畑を満足して見つめる。

……とはいっても勝手に自分のテリトリーと言っているだけで、私の土地ではないのだけれど。照りつける太陽と爽やかな風を肌で感じて上機嫌になりながら、鼻歌なんぞ歌って水やりをする。この世界は、常におだやかな気候が保たれており快適だ。たまに雨は降るけれど嵐なんか全然ないし、聞くところによると、年中一定の気温らしいから驚きだ。

だけど私はまだこつちに来て半年なので、あと半年過ごしてみなければ本当に年中一定かどうかはわからない。なぜ半年かというと、話は半年前に遡る。

その日、会社も休みの日曜日、朝から行ったホームセンターの帰り道。手にはミニトマトの苗を持っていた。なぜなら、今住んでいるアパートのベランダでミニ家庭菜園をやるべく、苗を購入してきたところだったから。昔から花や野菜を育てるのが好きで、機会があれば本格的に畑を耕してみたいものだ、と常々思っていた。

まあ、あまり若い娘の趣味としてふさわしいとは言えないので、アパートのベランダなどのせせこましい空間でひっそりとやっているだけなのだが。

なにせ、ミニトマトは実用的だと思う。

サラダにもなるし、お弁当の色どりにも最適だ。

さあ、家に帰ってプランターに植え替えて肥料をやらなくては！

と、意気込んでいた矢先、いきなり視界に入ってきたのは光。全身を包む光。

自分の体が突然光に包まれ、何事!? と思ったのを最後に、私は意識を手放した。

……

……………

チチチチチ

——どこからか、鳥の鳴き声が聞こえる……。ああ……。もう朝か……。仕事……。仕事に行かない

と……

……って、仕事!?

私は跳ね起きた。先程の出来事は夢か、幻か。いや夢じゃない。その証拠に……

「どっ……どこよ!? ここーっ!」

気がつけばあたりは緑の木々が生い茂り、地面に寝そべっている状態だった私。そして手には先程購入したミニトマトの苗、一株九十九円が袋に入ってしつかり握られていた。

「えーっ? えーっ!」

確か、確か、早く帰ろうと急ぎつつも普通に道路を歩いていたはず。それがなんで、こんな場所に来ちゃっているわけ? しかも住宅地にいたはずなのに、マイナスイオン溢れる緑の木々に囲まれているし!

もしかして、私……道に迷った!?

……少し考えて、その可能性はないことを悟る。

いくらなんでも、迷子とは、スケールが違う感じがする。まずは、落ち着け私。さあ、よく考えて。とりあえず起き上がり、全身についていた土を払う。心を落ち着かせようと努力しつつ、まわりを改めて確認してみると、あたりは木に囲まれていて、人の気配など全くない。軽くパニックに襲われ、泣きそうになった。

「ここは……どこだ……」

いきなり光に包まれたかと思うと、見知らぬ土地で、しかも森。この状況は私に向かって『死ぬ』と言っているのと同じことじゃあないか。それともアレですか。リアルサバイバルですか。自分で仕掛けなんか作って小動物とか仕留めて食べるようなサバイバル生活に突入しろと!? うさぎを追

い、山を越え、魚を捕まえ、川を渡る生活!?

死ぬのも嫌だけど、サバイバル生活も無理だと涙が出そうになった。いや、確実に目尻には涙が溜まっていたはず。

心が折れそうになった瞬間、後ろの茂みから何かの気配を感じ、私は息を呑んだ。

もしかして熊とか狼とかに、遭遇しちゃったりして!? うさぎを追っかける前に私が食料になったりして!?

危険な考えは、ぐるぐる頭の中を回るのに、足はぴくりとも動かない。頭の中でこれまでの人生が走馬灯のように駆け巡りそうになった瞬間――

「あら? あんた、どうしたねー?」

茂みから現れたのは、熊でも狼でもなく、まぎれもない人間、そして女性だった。その瞬間『助かった!』とガッツポーズをしたくなった私だが、どこか違和感を感じて振り上げかけた腕をいったん止め、目の前の女性をまじまじと見つめる。

「あんた、どこから紛れ込んだんだね? ここら辺一带は私有地だよ」

不思議そうに言う女性を、私も不思議な思いで見つめていた。だって……服装が……

「あんた、不思議な格好してるけど……どこから来たんだい?」  
……その台詞、そっくりそのままお返ししたい。だって、目の前の女性は、本でしか見たことのない、中世ヨーロッパのような服装。ふんわりとした長めのスカートにエプロン、まるでどこかのお城に仕えるメイドさんだ。

「あの……すみませんけど……ここは……どこです……か？」

答えを聞くのは怖いけど、勇気をふりしぼり目の前の女性に尋ねる。

「ここ？　こちら辺一带は、ヒューストン伯爵の私有地で部外者は立ち入り禁止だ。あんたは一体……」

ヒューストン！

ヒューストンって何ね！

そんな地名、日本に、いや、近所にあつたっけ？　私が歩いていける距離に？　もしかして、ここアメリカ!?　一瞬にして海を渡っちゃった!?　思考回路がショート寸前、いや、完璧ショートした、その瞬間――

「どこだよ、ここー!？」

もう駄目だ。

私は、こらえていた涙をいつせいに解放し、人目もはばからず大声をあげて泣きわめいた。

私、宮川莉月。

途方にくれて泣きわめいた二十歳の初夏……

チーン。

しかし、いま思い出してもアレは恥ずかしい。いい大人が初対面の人の前で鼻水を垂らして号泣するなど、普段の私からは考えられない行動だ。それだけ、パニックになっていたっていうことだ

ろうな。おかげで何故か日本語が通じたことにビックリするのも忘れてた。

私は、畑に水をまきまき半年前の回想にふける。

あのあと、私は号泣し続けた。女性は、そんな私の様子にドン引きしていたようだったけど、しばらくすると、泣いている私をそのまま放置できないと思ったのか、いろいろと気遣ってくれた。女性の名前は、マーサさんといった。

号泣し続ける私が落ち着くのを待って、マーサさんはゆっくりと優しく話をしてくれた。

ここはカールディア王国のヒューストン伯爵の領地だということ。自分はここでメイドとして働いているということ。そして、私の目をまっすぐに見つめて言った。

「どこか余所の世界から迷い込んできたね」

びっくりした。マーサさんは、私の当たってほしくない予想をドンピシャで言い当てた。

なんでも、このカールディア王国では、数年に一度、異世界人が迷い込んでくることがあるとのこと。

だから、マーサさんも驚きながらも冷静に対処してくれたのだった。

異世界に来たなんて信じたくなかったけど、自分の身に起きていることだ、信じるしかあるまい。しかし、よく小説とかで異世界トリップってあるけれど、あれじゃない？　だいたいトリップ先は、その国の王子のもととかで、惚れたはれたの逆ハ―展開が待ち受けているんじゃないの？　こんな森の奥地で、道に寝っ転がって泥だらけって設定、あんまりじゃないか。

神よ、ガッデム。私が何をした。

自分あまりにも可哀そうで途方に暮れ、涙が止まらない。

そんな私に、マーサさんは大層同情してくれたらしい。

「大丈夫、このカールディア王国は異世界人を見つけたら保護し、元の世界に戻るまで面倒をみるのが普通なんだ。迫害なんてしないよ。そもそもヒューストン伯爵は大変慈悲深いお方。きっとあんなのことも面倒みてくださるから、心配することは何もないよ」

マーサさんの台詞を聞いた瞬間、涙が止まった。

「え……？ 元の世界に戻るができるの？」

「ああ、異世界から来た人たちは、時期が来たら皆帰っていくっていう噂だよ。だからあんたも安心おしよ。あんなのは、ヒューストン伯爵に私が頼んであげるからさ」

元の世界に戻れるという一筋の光と、初対面のマーサさんの優しさにまた涙が出てきた。

それから私はマーサさんに連れられ、ヒューストン伯爵との対面を許された。

初めて会う伯爵は、優しい顔立ちの中にも威厳が滲み出た素敵なおじさまで、まさにダンディ、ダンディズム。

元の世界に戻るまで、この領地でマーサさんと一緒にメイドとして働くことを快諾してくれた。惚れてしまうだろう！ 弱ってる時にそんなに優しくされてしまうとっ！

なんて、一瞬本気で思ったが、長年連れ添った奥様もご子息様もいるそうなので、懂れで終わらせることにする。

そうして、あれよあれよ、という間にヒューストン伯爵の敷地の一角にあるマーサさんの家に居候としてお世話になること、翌日から伯爵の城でメイドとして働かせてもらえることが決まり、その日の晩はマーサさんの家で、温かい食事をいただき、柔らかい毛布にくるまってぐっすり熟睡した。我ながら神経が図太いと認識した一日だった。

そんなこんなで、あれから半年。

いまだに元の世界に戻る方法はわからないけれども、焦ってもしようがない。「異世界人は時期が来たら元の世界に帰る」というマーサさんの言葉を信じて、どうせなら自分のこの状況、立場を楽しもうと割り切り、充実した毎日を送っていた。

ヨーロッパあたりの古城の雰囲気を持つ城は新鮮で面白いし、マーサさんを筆頭とする皆も優しい。

はじめは「異世界トリップは王子様つきだろ！」とリアルに思ったが、右を見ても左を見ても王子様なんていやしない。けれど、よくよく考えたら、王子様よりもマーサさんに会えたことのほうが何倍もありがたい。マーサさんは、こっちの世界で私を助けてくれ、しかも一からいろいろ教えてくれた、いわば命の恩人だ。マーサさんがいなかったら今頃、私は森で熊か狼の餌食か、はたまた、うさぎを追っかけるサバイバル生活の末、狩りが一度も成功することなく餓死していたかもしれない。

そうやってマーサさんへの感謝の気持ちを新たにしつつ、水やりを終えた畑を眺める。



「よし！ 今日も、水やり完了！」

満足して声に出す。実は城で働き始めて真っ先にしたことは、このヒューストン伯爵の土地のはずれに、ちよつとした畑を作ることだった。そうして、そこに私と共に異世界トリップしてきた運命共同体のミニトマトの苗を植えてみたのだ、駄目もとで。

それが、予想に反して、育つわ育つ。

もともと土地が栄養たっぷりなのか、それとも気候が適しているのか、あつという間にミニトマトは実り、もはやミニとは言えないぐらいの大振りのトマトになって赤く熟れている。

株を増やしてみたら、あつという間に菜園状態。うはうはだ。

こつちの世界には、トマトという野菜がないようで、最初収穫してマーサさんにあげたら、おっかなびつくり口にしてたっけ。でも食べたあと「すっぱいけど甘くて美味しい」と言ってくれたので、調子にのつた私は朝晩畑へと通い、水をやったりわき芽を摘んだりして、せっせとトマトを育てていた。

私もトマトは大好きだし、何よりマーサさんの喜ぶ顔が見たいから。

## 2 トマト畑に侵入者

そんなある日のこと。

その日もいつものように早朝、城での仕事の前に畑へ水やりに行く。

早朝なので、少し霧がかかっているけど、慣れた道のりなので足取りは軽い。

だてに毎日、朝晩通っていないもんね。

—— だけど、その日は思わぬ先客がいた。

私が畑につくと、霧の中に人影があった。いぶかしんで恐る恐る近づくと、相手もこちらに気づいたように私を振り返る。

「お前は……」

振り返った人物に、私は目を見張った。

流れるハニーブロンドの髪は長めで、空を思わせる蒼い瞳、すつきりとした鼻筋、霧の中でも美形とわかる整った顔立ちの男性が、私をまっすぐに見つめている。

やけに美形なその男性と目が合った瞬間、私は固まった。

そして次の瞬間——

私は走り出し、目の前の彼を勢いよく突き飛ばした。

その男性は、ふらつき、二、三歩後退する。私的には全身で猛タックル、ラグビー選手並みにアタックしたつもりだったが、そこは体格差であろう。

「……何を……！」

『何を』じゃないわよー！ そこ！ 踏んでるっ！』

さっきまで美形がいた場所を指さして、訴える。

「そこにミニトマトの小さい苗を植えたばっかりなんだから！　いま踏みつけてたっ！」  
きつと私は涙目になっていたに違いない。

「苗……？」

「そうよっ！　ミニトマトの苗よっ！　昨日植えたばかりなのに！」  
いきなり私に突き飛ばされた挙句、言葉攻めにあい、目の前の彼は一瞬あつけにとられた様子だった。が、すぐに体勢を立て直し、偉そうに腕を組んだあと、人のことを頭のとっぺんからつま先まで観察する。そして、

「……で、名はなんと言おう？」

と高飛車に聞いてきた。

人に尋ねるのに、何じゃ！　その上から目線な態度はあー！

しかも、さっきから言ってるだろう！　人の話を聞いているのか！　と思いつつも、

「だから『ミニトマト』だってばー！」

私は胸を張ってその名を主張する。どうだ！　見事なミニトマトたちだろう！　私が栽培しているのだ！　うはははは！

目の前の彼は、少し不思議そうな顔をしながら、

「……ミニ……トマト？」

と聞き返してきた。私はコクンと一つうなづく。

「……変わった名前だな、お前」

「つて、私がかいっ!?」

「今、自分で言ったじゃないか」

「だから、それは畑の作物の名前っ！」

いくらなんでも『ミニトマト』なんて名前、つけられたら親を恨むつて。

ミニトマト……実煮戸真戸……ミニ都魔斗……つて、当て字にしてもあんまりだ。しかも最後の格闘系でやたら強そうな気がする。この名前なら親を恨むどころか、確実に殺意を抱くね。私、女の子なんだから！　……いや、男でもそんな名前嫌だ。

私の思いっきりひきつった顔を見ても、ちつとも気にした風もなく、目の前の彼は涼しい顔で聞いてきた。

「で、お前の名前は？」

再度の上から目線な態度に、カチンと来た。人に尋ねるのにその態度ですか、ああそうですか。ちょっと美形だからつて、そんな俺様な態度は初対面の人間にどうかと思うんですけどね。

私は先程、自分がその初対面の人間をいきなり突き飛ばしたことも忘れて、

「人に尋ねる前に自分が名乗るのが礼儀です」

と、つっけんどんに言つてやった。

「……俺のことを知らないのか」

彼は少し驚いたような顔をする。

「……俺は逆にそつちの態度にビックリだよ！　いるんだよね、こういう、ちょっと美形だけ」

らって自分のことを知らない人はいないはず！ と思っている自称有名人みたいなのが。かーつ。見てらんないね、その思い込みの激しさ。だからはつきりと言ってやった。

「知りません」

はつきりと、まっすぐに、彼の蒼い瞳を見つめて言い放つ。

彼は空色の瞳を一瞬大きく見開き、驚きの表情を作った次の瞬間——笑った。

唇の端を少し上げて、まるで面白い物でも見るような視線を向けたあと、目を細めて柔かい笑みを浮かべる。私はそれを見て、不覚にも一瞬ドキッとしてしまった。

そして、ハニーブロンドの髪を風になびかせ、蒼い瞳を細めながら微笑む様子に、整った顔立ちの人って笑うとなおさら美形度がアップするのね、と素直に感心した。

これだけの美形だ。きつと周囲の人間にもはやされた結果、こんなに高飛車になってしまったのかも知れない、などと冷静に分析する。

「アデレイだ」

「え？」

「俺の名前はアデレイだ」

何が面白いのかわからないけど、うつすらと微笑んだ彼は、頭一つ高い位置から私を見下ろして教えてくれた。

彼の名前は、アデレイか。

ふーん、と思った瞬間、大事なことを思い出した。

「……で、お前の名は？」

「やばっ！ 私もう行かなきゃっ！」

そうだ、朝だ、早朝だ。

早くお城に向かわないといけない。今日は早朝当番なのだ。

ここで見知らぬ人……いや、名前だけついさっき知ったアデレイと話し込んでいる暇はないことをようやく思い出した。水やりをしている時間もない。残念だけど、仕事が終わったらまたここに来よう。

今来た道に戻るべく、彼に背を向けて走り出そうとしたけど、ふいに思い出して彼、アデレイと向かい合う。

「ここはヒューストン伯爵の土地だから、勝手に侵入したら駄目だよ」

親切心から言ってやったのだが、彼は再度面白そうに目を細めて笑った。

「じゃあ、お前みたいに『トマト』とかいう物を勝手に植えるのはいいのか？」

何とも鋭いツツコミが返ってきて、一瞬ぐへえと、言葉に詰まるが、そこはなんとか笑顔でカバー。というより、笑って誤魔化す。

「土地の有効活用よ！ 食料にもなるし！」

開き直り、「じゃあ、私もう行くね」とだけ言って背を向けた。背中にきつきの男、アデレイの視線を感じていたが、時間がないので気にしちやいられない。

しかし、目的の水やりもできず、何しに行ったんだ、私。

朝のお城は慌ただしい。

私の仕事は、城の窓拭きや床の掃き掃除などの掃除全般に、ヒューストン伯爵の食事のご用意のお手伝いなどなど。

その日によって仕事は様々だけど、メイド頭のアドマさんをはじめとして、マーサさんや他のメイド仲間も皆優しいし、充実した職場環境だと思ふ。厳しいながらも丁寧に指導してくれるから苦手だった家事も、まあ上達したかもしれない。

今日も仕事有一段落したので、皆で甘い焼き菓子を囲んでちょっと休憩タイム。

温かい紅茶を飲むと、ほっとする。ああ、この時間が幸せだ。

そこで、おしゃべり好きなカリアが口を開く。

「ねえ、庭師のローディって、本当に素敵よね。今日も庭の掃き掃除の時、掃除しているふりをして私、チラチラ見ちゃったわ。遅しく日に焼けて、爽やかに『おはよう』なんて言うから、もう朝からドキドキしちゃって」

どうやら、カリアは庭師のローディにぞっこんラブ（死語）らしい。カリアは十代後半の赤毛でそばかすの可愛い女の子だ。そして恋について熱く語る。これって十代の特権だね。って私も最近まで十代だったけど。

「ねえ？ リツキは？ どう思う？」

矛先を向けられた私は、笑って誤魔化した。だって、ローディとやらの顔がぱっと思ひ浮かばな

い。実際いつか元の世界に戻るものと割り切っているから恋などする気もないし、仕事を覚えるのに精一杯で、男の人の顔と名前なんて一致しないのが正直なところ。

「おや、おや。つい最近まで、馬屋の飼育係のボブが素敵とか言っていたのに、もう心変わりかい？」  
茶目つけたつぷりに、からかうマーサさんに、

「いいじゃないのー。見ているだけでも目の保養だわ」

カリアは恥ずかしそうに赤くなりながらも笑顔で言った。

「でも、一番の目の保養といえは……」

それまで口を閉ざしていた皆も一斉に口を開く。

「ヒューストン伯爵のご息様よね!!」

全員が同じことを口にした。びっくりした私を尻目に皆が口々に騒ぎ始める。

「あの綺麗な顔立ち！」

「そして爽やかなあの笑顔！」

「物腰も柔らかくて！」

「あの方に声をかけられたら、もう一日夢心地よねー！」

なんだ、なんだ、私一人が蚊帳の外だぞ。あぜんとする私に、カリアが教えてくれた。

なんでもヒューストン伯爵のご息様は、とても美形で素敵なお方らしい。

今は王都のほうにいらっしやるが、長期休暇になると帰ってくる。そのたびにメイドたちのテンションが上がる、ということを知られた。

ふーんと思いながら聞いていたらカリアに、  
「そういえば、リツキは元の世界にいなかったの？ 好きな人」と、唐突に聞かれた。

「へ？」

間拔けな声を出す私に、カリアは興味津々といった様子で追及してくる。

「だってさー！ 絶対もてたでしょ！ リツキってば！」

いやいやいやいや、そんなそんな、私なんて、めつそうもございません！ あまりに突拍子もないカリアの言葉に紅茶を嘔き出しそうになった。

カリアの声の大きさに、皆も一斉にこちらを見る。

「そうだよリツキ！ あんた好きな人ぐらい、いなかったのかい？」

「いたでしょー？」

話の矛先が私に変わった。皆に質問攻めにされて、タジタジだ。

「だってリツキ、女の私から見ても綺麗だもん。悔しいけどさあ」

「そうそう。まっすぐに伸びた黒髪に、シミ一つない白い肌、ぱっちりとした二重瞼に、小さいながら少し上向きの赤い口。初めて見た時、驚いたわ。そしたら、でっかい目から涙ポロポロ流して、わーわー大泣きして。よく見りゃドロだらけだし、ビククリだったさー」

出会いをマーサさんに笑いながら語られて、赤面する私。

「私もリツキのこと初めて見た時、なんて綺麗なんだろうって思ったもん。ねえ、異世界人って、

皆こんなに綺麗なの？」

「いえいえ、めっそうもない！」

きつと皆、物珍しくて騒いでるだけだと思う。ほら、やっぱりどことなく漂う異国の空気というか雰囲気。

けど、まあ、褒められるとやっぱ嬉しいよね。照れるけどっ。

「こっちでは黒は神秘的な色として崇め<sup>あが</sup>られているからね。黒髪に黒い瞳なんて、憧れだよ」

「そうだよ、うらやましいー！」

日本じゃ、黒髪黒目なんて当たり前だったし、私はむしろ金髪に憧れてた。かっこいいじゃん？

金髪。

ふと、今朝会った金髪の男性のことを思い出した。

「アデレイって言ったよな？ 確か。」

「さー、思い出したのは、ほんの一瞬だけ。次の瞬間——」

「さーて、そろそろ戻るかね」

メイド頭のアドマさんの掛け声と共に、本日のお茶会は幕を閉じ、皆が持ち場に戻っていった。

さて！ もうひと頑張りしますか！

ヒューストン伯爵家の庭はだだっ広い。

そりゃもう、東京ドーム何個分？ というぐらい。一人でぶらぶら歩いてたら、迷子間違いないし。

現にこつちに来たばかりの頃に身をもつて経験済みだ。……あの時、庭を涙目でさまよう私をカリアに見つけてもらえなかったら……と思うと今でも怖い。

今は慣れたので、迷子になることもなくなっただけだね。……いや、うそ。たまに迷子になる。ハハ……

その広大な庭の隅々まで手入れが行き届いているから、感動だ。多種多様の、それでいてバランスのとれた色合いの花々は、見ている者の気持ちに幸せに思う。

今日の私のお仕事は、庭から花を摘んでくること。そしてそれを花瓶にいけて城に飾るのだ。さて、どの花を飾ろうかしら。

あたりを見渡すけど、本当にどれも綺麗。かすみ草のように可憐な花もあれば、薔薇のようにゴージャスな花もある。皆それぞれに個性があつて、本当に素敵。目移りしてしまう。

調子外れの自作の鼻歌を歌いながら、目をつけた花に手を伸ばす。

「ちよつと待って」

ふいに背後から声がした。驚いて振り向くと、そこにいたのは日に焼けて逞しい体つきの男の人だった。

年は私よりちよつと上ぐらいかな？ 筋肉質で、こんがり日焼けしていて健康的。茶色の短髪に、爽やかな笑顔の、気さくな感じのお兄さんって感じの人だ。

「今日飾る花は……って……あなた……」

男の人は、自分から声をかけてきたのに、急に私の顔を見つめて、口に手をあてる。何やら驚い

ている様子だ。

あれ？ なんだろう。異世界人が珍しいのかな。

けど、この城で働いてもう半年だし、私のこと見かけたことぐらいはあると思うんだけど……

「あの……」

おずおずと話しかけた私に、目の前の男の人は、なぜか真っ赤になつて、

「ああ！ すまない！ ちよつと、ポーツとしてた！」

と、手を振りながら弁解をした。

「花を飾るなら、ちよつと囲いの向こう側の花が、一番いい時期だ、つて教えようとしただけなんだ。迷惑だつたらすまないが」

そう言つて男の人は、慌てたように、ここから百メートルほど離れた木の囲いを指さした。なんと！ このお兄さんは、お薦めのお花を教えてくれたのだ。

親切な人だな、と感動してしまう。

「ありがとうございます！ 早速行つてみます！」

お礼を言つて立ち去ろうとする私を彼はひきとめる。

「待つてくれ。あんた名前は……リツキだろ？ 異世界から来たつていう」

「はい。やつぱり異世界から来たつてことで、ある程度有名なんですかね？ 私」

苦笑しながらも答えると、彼はちよつと困つたような顔をする。

「いや、あんたが有名なのは、単に異世界人だからつてわけではないんだけど……」

「？」

「とにかく……！」

そこで、彼は顔を上げ、逸<sup>そ</sup>らしがちだった瞳をまっすぐに私に向けて言った。

「異世界人ってだけじゃなく、あんたは皆から注目されているってことさ」

……？ 意味がわからず、首をかしげる。どういうことだ？ まあいいや。

再びお礼を言っつて、そそくさとお目当ての花を摘<sup>つ</sup>みに行こうと足を進めると、またもや声がかかった。

「また来るんだろ？ 城の中はいつも花が飾られてるもんな」

「はい、当番制ですが、アドマさんに指示されて摘みに来ます」

飾った花が枯れてしまう前に交換するため、三日に一度ぐらいのペースで花を摘みに来るのだ。

「じゃあ、またあんたが来た時のために、一番綺麗に咲いている花を見つけておくから」

「ありがとうございます」

「……だから、また来いよ！」

「はい」

「俺の名はローディ、この庭の管理をしているから、また来たら声をかけてくれ」

そう言うところローディは日焼けした顔に、ひとなつつこい笑みを浮かべた。

私はその名前に聞き覚えがあるような気がしながら、その場をあとにした。

水場で花を花瓶に移し、その美しさにしばらくうっとりしていると、カリアが慌てふためいて走り寄ってきた。

「大変！ 大変、リツキ！」

「どうしたの？」

「伯爵のご息様が急遽<sup>きゅうきょ</sup>、王都からお戻りになったそうよ！ 昨夜遅くについたんですって！」

興奮で頬が上気しているカリアに、私が示す反応は――

「……ふーん」

「何よおっ!? リツキの反応！ それだけっ!？」

カリアはあきらかに不服そうだ。

「だって私、会ったことないし、まあ、はつきり言っつてしまえば関係ないとか……」

「何言っつてんの!? ご息様は、年齢二十二歳、誰もが認める美形！ すらりとしたスタイル！

優しい微笑み！ 私たちメイドの者にも優しいし、それに何といつても、この伯爵家の跡取り！

お金持ちよ」

「……あれ？ カリア、さつき誰かのことかっつこいって言っつて……」

そこまで言っつたところでカリアに遮<sup>おさ</sup>られる。

「何言っつてんの！ ご息様は観賞用よ！ 雲の上の存在よ！ 見かけるだけで、存在を目にするだけで幸せな気持ちになれるお方よっ!」

……なるほど。

目の保養的存在ね。ふむふむ。

「そっか。私もいつか会うことができるかもね」

「そう！ そのことなんだけど……」

カリアが興奮冷めやらぬ様子で教えてくれた。

「なんでも、長期休暇が取れたらしくて、しばらくこちらに滞在なさるみたいよ。ほら、伯爵の奥様の具合がよろしくなくて、北のお屋敷のほうでもう何年も療養中じゃない？ それもあって、伯爵が寂しくないように、長期休暇になるたびに長めに滞在されるの」

「親孝行なご息様ね」

「そう！ お優しいご息様だわ！ それに長期休暇ってことはつまり……」

「つまり？」

「ご息様のお顔を見れるチャンスが増えるってことよね！」

浮かれているカリアを見て、メイド仲間たちのモチベーションが上がるのは良いことだと思った。

「とにかく！」

カリアの声にびくつとする。

「昨夜遅くにお城について、まだお休みになっているらしいから、お見かけできるのを楽しみにしていきましょうね。あと……」

コホンと咳払いをして、カリアが言う。

「ご息様に紅茶を運ぶ役目とか、ご息様に関するお仕事は、抜け駆けなしのジャンケンよっ！」

カリアにまだまだかつてない勢いで力説されて、私はただうなずくしかなかった。

### 3 侵入者はへんな奴

「遅かったな」

……招いていない客が……いた。

日課の水やりに来た私の目の前には、先客がいた。

知り合ったばかりの彼、アデレイだ。

なぜ彼がここにいるのか、わけがわからず思考停止。

そんな私をまっすぐに見つめる、アデレイ。

彼は一体何をしにここまで来たのだろう。

不審げに彼を見つめていたら、そんな思いが伝わったらしい。

「なんだ。何を考えている」

目の前の男、アデレイはなぜか面白そうに言った。

何を……って。あなたが聞きますか。こっちが聞きたいよ。何かご用ですか？ 私の畑が気になりますか？ トマトはあげませんよ。それとも、もしや伯爵に密告するつもりですか？

「伯爵の土地で、勝手に畑を作っている奴がいます。もはや家庭菜園という可愛いレベルではない



です」と。

それは、まずい。それはまずいぞおおおお。

ヒューストン伯爵家の土地は、緑と花に囲まれた、まるで童話に出てきそうな素敵かつメルヘンチックな風景なのに、実はその一角にはこんな所帯じみた畑がありました、しかも無断で、なんてことが知られたら、さすがにイメージダウンにつながる。

目の前の彼を見つめる。

サラサラした細いハニーブロンドの髪に、意志の強そうな空色の瞳。すっきりした鼻筋、長身に長い手足。

やっぱり美形だな、この人。立っているだけでも様さまになっている。

加えて、白がベースの服は軽装だけど、物は上質だとわかる。腰に巻いているベルトも、履いているブーツもきつと一流品だと第六感が告げている。

この人、身につけている品物はシンプルだけど、全部高級品だと思う。

まさにシンプル・イズ・ベストみたいな。

そんなことをぐだぐだ考えながら見つめていたが、ふいに目の前の彼もまた、私のことを観察していることに気づいた。

「何を考えていた？」

面白そうに聞いてきたので、こちらも正直に出ることにした。

「いや、ここで何をしているんだろうなあって思っただけ」

ストリートに自分の気持ちをぶつけると、アデレイは、くくくつと口の端を上げて笑った。

「早朝の散歩の途中だ」

へえ、そうなんだ。健康的だな、この人ってば。

そんなことを考えながらアデレイを見つめる。見た感じ二十代前半ぐらいに見えるが、普通このぐらいの年頃の人が早朝に考えることといえば『眠い』『だるい』に加えて『あくあ、仕事行きたくねえな』じゃないだろうか。

そしてたまの二日酔い。

それは日本で育った異世界人である、私的偏見かもしれないが。

……てことは、こないだも早朝散歩の途中だったんだろうな。めちゃくちゃ朝型だな、おじいちゃんみたいだ。ふと実家の祖父も毎朝五時に起床していたことを思い出す。そしてラジオ体操を日課としていた。

「いつもここに来るのか？」

「私？ 私は基本、毎日ここに様子を見にくるわ」

そう言いながらも、手を動かし水やりを始める。

その間も彼、アデレイはじつと私の作業を見つめている。その視線に、表面は平静を装っていたが、内心どきどきしていた。

いつ畑のことを突っ込まれるのか、詳しく聞かれたらどうしようか、と。

態度には出さなくても、根は小心でチキンハートな私ですから。

「……そういえば、まだ聞いていなかったな……」

「へ？」

きつ、きたー！

ついにきたよ、質問タイムが！

畑？ 畑に見えますか？ いや、これは私が植えたわけじゃなくて、自然に成長している、不思議な赤い実ですよ。たまたま、見つけて育てているんです。それで『ミニトマト』って勝手に命名したんですよ！ ほくら、可愛い名前でしょ？

「人に尋ねる時は、自分からと言ったのはそっちだろう。だから俺は答えた。今度は、そっちの番だろう？」

上から目線の彼の言い分に、一瞬ポカーンとして口が開いた。

「……はい？」

何？ なんて言った、この人？

畑関係はスルーですか。ほっと安心し、つい頬が緩む。

しかし、今度は私の番とは一体何のことだろう？

今度はそっちのほうに頭を悩ませ、不思議顔になってしまふ。さっぱり思い出せないけど、何か約束でもしたっけな……

正直、記憶がない。アデレイの顔を見つめながら考える。

風になびくハニーブロンドの髪は、日に透けてより一層金色に輝いて見え、まっすぐに私を見つ

める蒼い瞳は透き通っている。まるで、童話に出てくる王子様みたいだな……

いるんだな、異世界にはこーゆう王子様チックな人……

漫画の世界以外にもいるんだな……八等身の間違って……

ぼーっと観察していたら――

「聞いているのか？」

ハッ！ その声が聞こえた瞬間、我に返りました。すみません、心は違う方向に向かっていました。だけど、約束なんて正直覚えてない。

昨日の晩ご飯すらすぐには思い出せない私に、そんな昔の話を思い出させるのは無理、無理、無理。「えっと……なんでしたっけ？」

ここは、はつきりと正直に、だけど思いっきりの笑顔で尋ねよう。おどおどと申し訳なきように聞くより、正々堂々と聞き直ってスマイル満点で聞いたほうがいいのだ。人間開き直りが肝心。

私の満点の笑顔とは裏腹に、目の前の彼はそっぽを向いた。盛大なため息を一つついたあと、私のほうに向き直る。あれ？

今ため息ついたよねえ？ 思いっきり呆れたよねえ？

そんなツッコミは心の中にしまつて、ニコニコと笑みを絶やさない。スマイル全開。

「……お前の名前だ」

……は？

「私の……名前……？」

「そうだ。言っただろう、『人に尋ねる前に自分から名乗れ』と。だから俺は名乗った」

……思い出した。

そういうえげそうだったような気がする。しかも、私ってば偉そうにそんな台詞セリフを吐いた挙句、結局自分の名前を言わずに立ち去った気がする。けど、そんなことを聞くためにわざわざここに来たの？

「私の名前……？」

「ああ」

「私の名前は……」

名乗ろうとした瞬間、強い風が吹き、彼の髪がふわっと流れる。私の黒髪も同じように風に揺れた。今日はいつもより風が強いと思いつながら自分の髪を手で押さえる。私が口を開くより先に、彼が言葉を発した。涼しい蒼い瞳をまっすぐに私に向けて。

「……リツキ」

「えっ？ どうして……」

私の名前を知っているの？ その疑問を口にする前に、彼がまたもや先に口を開いた。すごく優しい眼差しで、それでいて真剣な顔をして。

「最近話題になっている異世界人とは、お前のことだろう」

まっすぐに質問される。なんだ？ 最近話題って。異世界人ってそう珍しくもないって聞いているけど……

「話題かどうかは知らないけど、確かにこの国の人たちから見たら、私は異世界人って呼ばれるのかもしれない」

……同じ人間なのにね。

最後の部分は、自分自身に言い聞かせるように下を向いてつぶやく。彼に聞こえているのかいないのかはわからないけれど。

そしてすぐ顔を上げて、彼に問う。

「だけど、どうして？ それに最近話題って……？」

「自覚なしか……」

彼のつぶやきに、私はますます首をかしげる。

「この世界には、異世界人が時おり迷い込む。だが、黒髪に黒い瞳を持つ神秘的な人間が迷い込むことは珍しい。そのうえその容姿では話題になるのは当然だろう。使用人の男たちはそろって浮足だっていると聞いたが」

黒髪に黒い瞳って珍しいのか。ってことは、日本人が迷い込むことは稀まれということ？

けど、時が来たら帰ることができるんだよね？ マーサさんがそう言ってたし。

急に不安な気持ち広がる。いつかは帰れるんだから、それまでここでの暮らしを楽しまなきゃ損だと割り切ってきたけど……

「迷い込んだ異世界の人たちって、皆いつか帰るんですよ!? 今まで迷い込んだ人たちも帰ったんですよ?」

アデレイは、じっと私の目を見つめて、

「……そうだな。時期がきたら帰るのかもな」

誰に言うともなく囁き、微笑する。不安になっていた私は、その言葉に安心し、つられて笑顔になった。

「だけど、私は運が良かったと思うの。ここに来て最初に出会ったマーサさんは本当に親身になって私の世話を焼いてくれた。そして伯爵も、私は得体のしれない異世界人なのに、快くお城で働くことを許可してくれたわ。正直この人たちには、だいぶ救われている」

アデレイは、またしても私の顔を見つめ、ふっと笑った。

「そうか」

「ええ、そうよ。本当にそうだわ」

人間どんな状況に陥っても、プラス思考で一つでも多くの「いいこと」を探したほうがいいと思う。自分の状況を嘆いていたって何も変わらないから、レッツ、ポジティブ・シンキング！

「そうか」

「ええ、そうよ」

「この土地の一角で、自分の畑も作れたしな」

「えっ!? それは……」

慌てる私に、アデレイはくくくつと再度口角を上げて笑った。

ばれてる、ばれてる、モロばれやんけー！

だけど、それ以上は追及してこない。なんとなくだけど、他言はしないような気がする。

「じゃあ、そろそろ行くね」

「……ああ、またな」

彼は私に軽く右手を上げて、微笑んだ。

なんだなんだ、その仕草。やけに美男子オーラを振りまいてるけど、相手は私だぞ。無駄だ、もつたない。だけど、本物の美男子っていうのは、あーゆう仕草も自然なのかもしれない。……美形の考えることは正直よくわからんが。

しかし、アデレイ……。お城の関係者か何かか？ 私と同じ使用人か？ いや、でも彼の放つオーラというか気品は、一般人のそれと、ちと違う気がするが……。まあいいや。あとで誰かに聞いてみよう。

呑気に考えながら、いつものように畑をあとにした。

ふん♪ ふん♪ ふん♪

今日も元気に鼻歌混じりで、お庭散策。

本日の私のお仕事は、このお庭でのお花選び。

さあ、今日一番のお薦めのお花はどこでひっそり咲いているのかな？

枝切りハサミを片手に、庭園をずんずん歩く。ああ、癒される緑の庭園よ。咲き誇る花に、青々とした緑。風は心地よく、きつとマイナスイオンたっぷりだ。

振り返ると広大なお城。日差しを眩しく思いながら、由緒正しき立派なお城を眺める。

お城の部屋数はいったいどのくらいなんだろうか。このお城でかくれんぼでもしたら、確実に迷子だな。

「おはよう！」

ぼーっとお城を眺めていたら、後ろから声がかかった。振り返ると、ローデイが立っている。どこからか走ってきたらしく、顔がほんのり上気して赤い。

「あ、おはようございます」

頭を下げ、笑顔で朝の挨拶。これ基本。

「今日も、花を選びに来たのかい？」

「はい、そうです。それで今日は、どの花がお薦めですか？」

微笑みながらローデイに問いかけると、ローデイは先程より、もっと赤い顔になった。あれ？

「きよ……今日は、向こうの噴水の手前に今朝咲いたばかりの赤い薔薇がある。そ、それがお薦めだ」  
なんだか赤い顔でしどろもどろになりながらも、ローデイは噴水を指さし、教えてくれる。

実は、私も噴水の手前にある薔薇が気になっていたのだ。つぼみをつけた頃から目をつけていて、一番綺麗な時に摘んで城に飾ろうと思っていたので、時期が来たことに私は喜んだ。お礼を言っ  
立ち去ろうとしたら、ふいに呼び止められる。

「あっ、あのさ」

「はい？」

「今度さ……！」

「はい？」

「おれ……！」

「は？」

「おれ……！」

そこまで言っ  
てローデイは一息つき、そのまま黙ってしまう。次に続く言葉を待っているのに、なかなか出てこないらしい。

「なんだろう？ 『おれ』『おれ』って。おれおれ詐欺？」

この異世界で面と向かって『おれおれ詐欺』はなかるうと、自分自身にツッコミを入れていて、意を決したようにローデイが口を開いた。

「おれと今度、休みの日に市場にでも買い物に行かないか？」

「えっ？」

「そこで、美味しい物でも食べてさ」

……それはどういう意味だろうか。市場に行っ  
て、食料品の買い出しに付き合っ  
てほしいとか、そういうことか。

「えっと……」

私は返答に困る。ローデイは赤い顔をしたまま、私を見つめて目を逸らさない。正直、休みの日はお世話になっ  
てるマーサさんのために掃除をしたり、慣れない家事に悪戦苦闘したり、たまにカ

リアと休みが合えば遊びに行ったりと忙しいんだけど、ローディは私のことを暇人だと思っているのか。だから、市場に連行して一緒に用事を足してほしいのか。

なんか断りにくいけど……

迷いながらもローディを窺うと、私の返事を待つて緊張している気配が伝わってくる。ううう、どないしょ。悩んでいたらふいに、後方から声がした。

「誘われてるのか、お前」

……こっ……この声はっ！

確信と共に後方を確認すると、声の主はやはり予感的中、アデレイだった。

なんで、こんな場所にアデレイがっ!? これまで畑でしか会わなかったのに!

私は一瞬パニックになる。それと同時に、ハニーブロードの髪と蒼い瞳を持つ美形アデレイが、緑に囲まれ多種多様な花が咲き誇る庭園に、あまりにも似合いですぎていて度肝を抜かれた。なんだか私とローディがミスマッチな気がしてきた。……すまんローディよ。

ローディは、いきなり現れた人物に驚いたのか、口を開けたままアデレイを凝視している。対するアデレイは眉間に皺を寄せて、そんなローディを横目で見ていた。

あれ? アデレイ?

いつものアデレイの雰囲気とちよつと違うモノを感じる。そう、どつちかというと、不機嫌なオーラが漂うというか……

いやいや、しかし関係ない! ようやく状況を把握した私は、

「ちよ……、ちよつと、用事を思い出したので、失礼します!」

定番の言い訳をしどろもどろに伝えると、いきなり目の前に現れた男、アデレイの袖をぐいぐい引つ張って無理矢理その場を離れさせる。

とりあえず清らかな水の流れる噴水までアデレイを連れ出すことに成功。

「見かけによらず、積極的だな」

「は!?!」

「だが……。そういうのも嫌いじゃないぞ」

先程までの不穏なオーラはどこへやら、ハニーブロードの髪を光に輝かせながら、目尻を下げて、嬉しそうに見つめてくる彼に思いつきり眉をひそめる。

「……何を言ってるのか、まるつきり意味不明だけど」

彼の思考回路は一体どうなっているのか。意味不明なイミフ発言は、この際スルーしよう。……ていうか、何でここにあなたがいるわけ?」

アデレイは、ふふんと鼻で笑う。

「俺がここにいやいやか?」

「いやいやいやいや、まずいでしよう!」

アデレイってば、もしや朝の散歩の途中でふらふら庭園にまで迷い込んだんじゃないでしょうね。ここは、ヒューストン伯爵家の土地だよ、関係者以外が入ったらまずいって、何回も言ってるでしょう!? 散歩の途中で迷い込んで帰り道がわからなくなっちゃったなんてさあ、まだ若いんだか

ら、しつかりしてよね！

「何度も言ってるけど、ここはヒューストン伯爵の私有地よ。関係者以外は立ち入り禁止だよ。見つかったら怒られるわよ！」

「じゃあ、問題」

焦る私とは裏腹に、さも愉快そうにアデレイは、私に向かって人差し指を立てて揺らす。

「俺がここにいっても怒られることはない」

は？ 思いつきり不審人物ですけど、その自信はどこから来るんでしょうか。誰か教えて。

「だけど、怒られないのには理由がある。その理由とは何だ？」

怒られない理由？ 何だソレ。

アデレイは、ここにいっても怒られないし、不審人物扱いを受けることもないということか……

そしてその理由は何だと思おう？ って、どうやら私に聞いているらしい。なぜなぞかよつ。全く

アデレイめ！ もったいぶるその態度が憎らしい！

そう思いつつも、アデレイが楽しそうなので付き合つてやることにする。

目の前のアデレイをじつと観察していると、ふいにひらめいた。

「まさか！」

「わかったか？」

「今日から、このお城で働くことになったんでしょ！」

自信たつぷりにアデレイに言う。

アデレイは一瞬、私の答えに面食らったような顔をし、その後いきなり噴き出した。そして、笑いが止まらないという感じで心底楽しそうに声を出して笑い続ける。

なんだ、失礼な奴だな。

むつとくるが、この反応を見る限り、どうやら私の出した使用人説は消えたな。あとは……

「もしかして、このお城に招かれたお客様……とか」

そうだ、よく見る、私よ。アデレイの身につけている物は、全て一級品ではないか。会った時に感じた違和感をもう一度思い出すんだ。彼の容姿、装飾品からいって、ただの使用人ではあるまいと。なんとか笑いを収めたアデレイは、

「……まあ、そんなとこかな？」

なんて、口の端を片方上げてあいまいに答えたあと、またもや愉快そうに笑い始める。人が真面目に答えたのになんなのさ、その態度。

「不法侵入で捕まったら大変だと思って心配してやったのに……」

ぼそりとおぶやいた言葉に、ますます笑いが止まらなくなつたらしい。どうやらツボにはまったようだ。この際、彼は放つておいて、自分の仕事を全うしよう。

噴水の手前には、ローディが教えてくれたとおり、真っ赤な薔薇ばらが咲き誇っている。薔薇のアーチなんて、本当に見事だ。

なんだか香りに酔ってしまいそうだ。この庭にずっといたら、私自身が薔薇の香りを身にまとうことになるんじゃないかな。

一面に敷かれた緑の芝を背景に、咲き誇る真っ赤な薔薇たちは、激しいぐらいに己の存在を示していた。

私は目ざとく狙いをつけた、一際大輪の薔薇に手をかけた。

「痛っ！」

指先に痛みを感じ、反射的に薔薇の枝から手を引く。どうやら、鋭い薔薇の棘にうっかり刺してしまっただらう。

人差し指から、血が一筋、道を作って流れ落ちる。その色はまさに薔薇と同じ色。薔薇の色が、私の体から流れていく……なんだか不思議な気持ちで人差し指から流れる深紅の道を見つめた。

それに気づいたのか、一人愉快そうに笑っていたアデレイがふいに真剣な顔をして近づいてきた。

「見せてみる」

私の右手を有無を言わず掴み、人差し指の傷口を見る。

「ああ……これは、結構深く刺さったな」

そう言うといきなり、傷口を指でなぞった。

一瞬、痛みがチクリときて、顔をしかめる。けれども抗いはず、その様子を見つめていた。

次の瞬間、アデレイは、私の指に優しく口づけた。

えっ!? と思った次の瞬間には、もう彼の唇は離れていた。

「薔薇は棘が鋭い。気をつけないと痛い目にあう」

私の目を見つめたまま言うと、なんてことないように微笑んだ。

私の右手を掴んだまま微笑む彼と、そんな彼を見つめたまま固まる私。

ふいにアデレイが私の右手を力強く引き寄せた。

バランスを崩した私は前につんのめり、結果的にアデレイの胸元に飛び込む形になった。

薔薇の香りが広がる庭園で、薔薇以外の香りが私を包み込む。

それは、弾ける水しぶきを思わせる爽やかなベルガモットの香り。でも、違う。香りが私を包み込んだのではなく、香りの主、つまりアデレイが私を抱きしめているのだ、とようやく理解して顔を上げると、彼と目が合った。

彼はこの状況が、まるで計算どおりとでも言うように、不敵に微笑み、真正面から私に問う。

「あれに何を誘われていた？」

あれ？ あれって、もしやローディですか？ アレ扱いですか。

いや、それよりも、何をするっ……!!

そう口にするより前にアデレイは私の腰を引き寄せる。気がつけば私はアデレイの力強い腕と見かけよりもずっと厚い胸板に包まれていた。

え……!! この体勢……!!

一気に近づいたアデレイとの距離と、私を包み込むベルガモットの香りに焦った私は、とっさに手を振り上げた。

空気を裂く鋭い音、つまりは私の手が相手の頬を叩いた音が、晴れた青空の下に響き渡る。

アデレイの腕の力が緩む。自分の頬が打たれたことに、驚いているのかもしれない。





その隙をついて、私はアデレイの腕から抜け出し、後ずさって距離をとる。アデレイは、打たれた左頬を押さえながら、口を開こうとした。そんなアデレイを遮って、私は思いをぶつける。

「何するのよ！ このエッチ！ エロ！ エロス！」

私は鼻息荒く、まくしたてる。

顔はおそらく真っ赤、先程アデレイに口づけられた人差し指をスカートにぐいぐい擦りつけ、拭きながらだ。

このお城のお客様だか何だか知らないけど、いきなり、何しやがんでえええ。

いくら美形だからといって、やっていいことと悪いことがあるわっ！ こっちの世界の貞操観念がどうなっているのかはわからないけど、私は私、乙女の純潔は自分で守る！

拭き終わった人差し指をアデレイに向かって突き付け、声も高々に言い放つ。

「たとえ綺麗な薔薇じゃなくても、棘はあるもんなんだよ！ 覚えておきなよっ！ アデレイ！」  
薔薇の棘は自分の身を守るもの。たとえ薔薇ほど綺麗じゃなくても、自分の身を守るためなら、私だって棘を出すんだからね！

私の勢いに呆気にとられていたのか、大人しく聞いていたアデレイが、ようやく口を開く。

「初めて……」

なんだよ、なんだよ、まさか『初めて女に叩かれた』とでも言うわけ？

そりゃ、残念でした！ いくら美形でも、万人が万人オールドオツケーではないのだ。

初めての挫折に打ちひしがれて、己の行動を悔いるがいい。言葉の続きを、少し緊張した面持ち

で待つ私に、アデレイが言葉が続ける。

「初めて呼んだな。俺の名を」

……………はい？

今……………なんと？

叩かれたことよりも、拒否されたことよりも、そっちですかい！

アデレイはハニーブロンドの髪を風になびかせながら、やけに満足げな表情を私に向けてくる。

アデレイ……………

初めて女に叩かれて、おかしくなってしまったのかもしれないと、本気で心配した。

意味不明に不敵に微笑む自称「客人」のアデレイを放置して、私は大輪の薔薇を抱えて城に戻り、水場で花瓶に移す。作業をしながらも、さっきの出来事を思い返していた。

あのあと、アデレイを無視して、薔薇を選んで枝切りバサミを大活躍させていたら質問された。

「今日は薔薇を飾るのか」

……………

もう、めんどくさいのでシカトしていたら、アデレイは気にすることなく言葉が続けた。

「薔薇とはいい選択だ」

「……………なんで？」

やばっ。つい好奇心に負けて、口をきいてしまった。シカトするって決めたばかりなのにいいい。

「俺は薔薇が好きだ」

はい、わかりました、左様でございますか。自信たっぷりと言うアデレイに、返す言葉がない。

しかもそこで自信たっぷりなところが、全くとって意味不明のイミフー君だ。

確かに、アデレイは、薔薇に負けていないぐらい綺麗な顔立ちだ。というよりいつも薔薇を背負って現れる気がする。そこまで華やかな人……………ってことだけだ。

しかし、口を開くと残念な人だ。

摘んできた薔薇を全て花瓶にいけ、お城の要所要所に飾る。かすかに漂う薔薇の香りが良い感じ！  
我ながら、グッドチョイス！ なんて自分で褒めたけど、本当はローデイのおかげだ。

ローデイは庭園に行くたびにお薦めすすの花を教えてください。誰よりも庭園を把握しているからできることだと思う。見習いたい、そのプロ根性。いつかは私も自分の仕事に胸を張れる日が来るのかしら。

## 立ち読みサンプル はここまで

### 4 紅茶の時間とご子息様

「あっ！ 戻ってきちゃった！」

「ええ〜！ ライバルは少ないほうがいいのにいー！」

給仕室に入った途端、その場にいたメイド仲間全員が一斉に私を見て騒ぐ。